

『三國志』魏書の典據について（卷一～卷十）

満 田 剛

はじめに

『三國志』の主な典據は、内藤湖南『支那史學史』に

陳壽の三國志も殆どもとの材料をそのまま使用して居り、その三國志になる時に削り残された點すら明かに見えてゐる。例へば三國志には魚豢魏略を最も多く採用してゐるが、その中に「今云々」とあるのは魚豢の魏略の今であつて、陳壽の三國志の今でないことがある。

（『内藤湖南全集』第11卷151～152頁）

と述べられて以來、魚豢『魏略』であると考えられてきた。また、榎一雄は、いずれにしても、明帝の本紀とそれ以前の本紀とに対する裴松之注に引かれているおびただしい王沈の『魏書』と、陳壽の本文とを比べてみると、それは『魏書』に陳壽を補うに足る記事の多かつたこと、すなわち、むしろ陳壽が『魏書』に依據しなかつた場合が多かつたことを示すものではあるまいか。（『魏志』「倭人伝」とその周辺(3) 榎一雄全集第八卷267頁）

と述べ、陳壽『三國志』と裴松之注所引『魏書』の武帝紀～明帝紀とを比較したうえで裴注所引『魏書』の数の多さを考慮し、陳壽が『魏書』に依據していなかつた場合が多かつたと指摘している。

筆者は、この點について考える際に『魏略』とともに重要な王沈の『魏書』についてそれまで基礎的研究がなされていなかつたことから、これを取り上げて佚文収集・整理を行つてその性格を分析し、少なくとも陳壽『三國志』魏書

(以下、『魏志』と略す) 本紀では基本的に魚豢『魏略』より『魏書』のほうを典拠としていたと結論した¹。

以上のことを踏まえ、本論文では陳壽が参照した史籍を何よりも含んでいると考えられる裴松之注に引用された240種以上の史籍・典籍の中から『魏志』の典拠となった史籍をできる限り特定しようと考えている。ここでは紙幅の関係から『三國志』巻一～巻十までを取り上げることとしたい。

まず、『魏志』(巻一～巻十)について、裴松之注のすべての文章を引用された史籍ごとに集め、裴松之注に引用されたすべての史籍と『魏志』本文とを比較検討した。その上で、裴松之によって引用された史籍から陳壽が典拠とし得たものをできる限り特定し、さらに裴松之による各史籍からの引用の特徴や、陳壽が見ていた可能性がある史籍について『三國志』本文と比較した上で陳壽の編纂に関する特色を明らかにしていくことも課題としている。

『魏志』(巻一～巻十) 本文と裴松之注との比較検討

具体的には、〔表1〕『『魏志』(巻一～巻十)における裴松之注所引史籍について』にある『魏志』裴松之注(以下、裴注)に引用された史籍とその條數・文字數・実際に陳壽が参照したと考える條數の記載を踏まえながら述べていきたい。

武帝紀において直接的な典拠とされた裴注所引の文章は、『魏書』17條²・『曹瞞傳』2條³・『魏武故事』2條⁴・『獻帝傳』1條⁵・魚豢『魏略』1條⁶・『褒賞令』載曹公祀文1條⁷と考えられる。また、典拠とした可能性があるものとして『九州春秋』1條⁸を挙げることができる。

文帝紀において直接的な典拠とされた裴注所引の文章は『魏書』10條⁹・『典論』1條¹⁰と見られる。

明帝紀では魚豢『魏略』2條¹¹・『魏書』3條¹²が典拠とされたと考えられる。齊王紀・高貴郷公紀については典拠とされた史籍が一つもなく、陳留王紀に

については陳壽が参照した可能性のある史籍そのものが存在しない。

上記の史籍の中で「曹瞞傳」・「魏武故事」・「典論」・「獻帝傳」・「褒賞令」については王沈『魏書』、もしくは魚豢『魏略』に同様の記事があった可能性が高く、裴注所引史籍の中で本紀、特に武帝紀・文帝紀・明帝紀の主たる典據となった史書は王沈『魏書』・魚豢『魏略』の二種と考えても差し支えないであろう。

先に引用した内藤湖南『支那史學史』以來、『三國志』の主たる典據は魚豢『魏略』であると考えられてきたが、〔表1〕から見ると、少なくとも本紀裴注において魚豢『魏略』を最も多く引用していたわけではなく、内容を比較してもそれほど典據とされているようには見えない。裴注所引佚文や〔表1〕から見る限り（少なくとも）本紀に関しては魚豢『魏略』よりも『魏書』を典據としていたように思われる。

たとえば、『魏志』武帝紀裴注所引王沈『魏書』を見ると、

魏書曰：長吏受取貪饜，依倚貴勢，歷前相不見舉；聞太祖至，咸皆舉免，小大震怖，姦宄遁逃，竄入他郡。政教大行，一郡清平。初，城陽景王劉章以有功於漢，故其國爲立祠，青州諸郡轉相倣效，濟南尤盛，至六百餘祠。賈人或假二千石輿服導從作倡樂，奢侈日甚，民坐貧窮，歷世長吏無敢禁絕者。太祖到，皆毀壞祠屋，止絕官吏民不得祠祀。及至秉政，遂除姦邪鬼神之事，世之淫祀由此遂絕。

（中華書局『三國志』〔以下『三國志』〕4頁 卷一武帝紀，『三國志集解』13b～14a）

とあるが、これは『魏志』武帝紀の

遷爲濟南相，國有十餘縣，長吏多阿附貴戚，贓汚狼藉，於是奏免其八；禁斷淫祀，姦宄逃竄，郡界肅然。

（『三國志』3～4頁 卷一武帝紀，『三國志集解』13a～b）

に付屬しているものである。この『魏書』の文章は陳壽のものと比較しても内容が類似しており、陳壽のこの文章は主として王沈『魏書』を典據にして書かれたと思われる。

王沈はおそらくこの文章に関してはほぼ（彼が参考にした）史料どおりの内容

を採録したのではないかと思われる。また、裴松之は、おそらく陳壽の本文の典據を示し、不足を補うために引用したのであろう。

また、『魏志』文帝紀裴注所引王沈『魏書』には

魏書曰：設伎樂百戲，令曰：「先王皆樂其所生，禮不忘基本。譙，霸王之邦，真人本出，其復譙租稅二年。」三老吏民上壽，日夕而罷。丙申，親祠譙陵。
(『三國志』61頁 卷二文帝紀，『三國志集解』11a)

とある。これは『魏志』文帝紀の

甲午，軍次於譙，大饗六軍及譙父老百姓於邑東。

(『三國志』61頁 卷二文帝紀，『三國志集解』10a)

に付屬しているものである。王沈『魏書』のこの部分は譙における曹丕の行動について記したものであろう。裴松之は陳壽が省いたためにわかりづらくなった譙における曹丕の行動を補足しようとしたと思われる。

陳壽は王沈『魏書』のこの部分を直接的には取り上げていない。この場合、譙における曹丕の行動が本紀で述べるべき内容に直接関係のないことであると陳壽が判断したためだったと考えられる。

ただ、王沈『魏書』のこの部分の前に裴注のついた『三國志』本文乃至それに類似した文章があったと思われ、陳壽が王沈『魏書』を参考史料の(少なくとも)一つにしてこの部分を書いたことも確かであろう。この王沈『魏書』の文章はおそらく公文書乃至それに準ずるものを参考にしたと思われる。

『魏志』明帝紀裴注所引王沈『魏書』には

魏書載詔曰：「昔先王之禮，於功臣存則顯其爵祿，沒則祭於大蒸，故漢氏功臣，祀於廟庭。大魏元功之臣功勳優著，終始休明者，其皆依禮祀之。」
於是以惇等配饗。
(『三國志』99頁 卷三明帝紀，『三國志集解』21a～b)

とある。『魏志』明帝紀の

夏五月壬申，詔祀故大將軍夏侯惇、大司馬曹仁、車騎將軍程昱於太祖廟庭。

(『三國志』99頁 卷三明帝紀，『三國志集解』21a)

に付屬している裴注所引の王沈『魏書』である。裴松之は陳壽が省いた魏の功臣を祭った際の詔勅を重要であると判断し補足したのであろう。陳壽が省いた

のは、魏の功臣を祭ることに關する詔勅が本紀で述べるべき内容ではないと判断したためと思われるが、この文章を本文の典拠としたことはまず間違いないであろう。

この王沈『魏書』の文章は内容から見て公文書またはそれに準ずるものを参考にしたと思われ、信頼性が高いと考えられる。

以上のように見ると、『魏志』本紀（武帝紀～明帝紀）には裴注所引王沈『魏書』を典拠としていた部分が存在していたことがわかる。

卷四三少帝紀のうち、齊王紀・高貴郷公紀については『魏書』や『魏略』を典拠としていたと考えてまず間違いないであろう。しかし、高貴郷公（特に彼の死に關わる部分）については、陳壽の記述が齊王紀までとは異なりを見せている。本田濟は『三國志』の特徴として「劇的・小説的描寫が少い」¹³と述べており、齊王紀までは確かにその通りなのだが、高貴郷公紀は逆に劇的・小説的描寫が中心となっており、簡潔な記述とはなっていない。おそらくは王沈『魏書』に依りながらも他の書籍に依據した部分が多いためと思われるが、『魏志』高貴郷公紀本文が『魏書』とほぼ同じである可能性も考えられる。ただし、それ以上は裴注が少ないこともあって判然としない。

陳留王紀についても典拠は『魏書』ではないかと思われるが、本文自体が短いことや王沈『魏書』の完成年代と近いことから、他の書籍、もしくは公文書を典拠とした可能性も充分考えられる。

卷五后妃傳についてであるが、卞皇后傳で典拠と考えられる史籍は魚豢『魏略』1條¹⁴、甄皇后傳については魚豢『魏略』1條¹⁵・王沈『魏書』1條¹⁶である。文德郭皇后傳・明元郭皇后傳については一つもなく、毛皇后傳については陳壽が參照した可能性のある史籍そのものが存在しない。

卞皇后傳・甄皇后傳については、この二つの傳において引用された王沈『魏書』の内容と『三國志』本文のそれとが異なっている部分が多い。

たとえば、

魏書曰：有司奏建長秋宮，帝璽書迎后，詣行在所，后上表曰：「妾聞先代之興，所以饗國久長，垂祚後嗣，無不由后妃焉。故必審選其人，以興內教。今踐阼之初，誠宜登進賢淑，統理六宮。妾自省愚陋，不任榮盛之事，加以寢疾，敢守微志。」璽書三至而后三讓，言甚懇切。時盛暑，帝欲須秋涼乃更迎后。會后疾遂篤，夏六月丁卯，崩于鄴。帝哀痛咨嗟，策贈皇后璽綬。

（『三國志』161頁 卷五甄皇后傳，『三國志集解』12b）

であるが、これは『魏志』甄皇后傳の

踐阼之後，山陽公奉二女以嬪于魏，郭后、李、陰貴人並愛幸，后愈失意，有怨言。帝大怒，二年六月，遣使賜死，葬于鄴。

（『三國志』160頁 卷五甄皇后傳，『三國志集解』12a～b）

に付屬している裴注所引の王沈『魏書』である。比較すると、王沈『魏書』は『魏志』とは異なった甄皇后が亡くなった際の経緯を記録している。

裴松之は陳壽の採録しなかった内容に関する諸説を補足しようとしたのであろうが、彼は王沈『魏書』のこの部分について

臣松之以爲春秋之義，內大惡諱，小惡不書。文帝之不立甄氏，及加殺害，事有明審。魏史若以爲大惡邪，則宜隱而不言，若謂爲小惡邪，則不應假爲之辭，而崇飾虛文乃至於是，異乎所聞於舊史。推此而言，其稱卞、甄諸后言行之善，皆難以實論。陳氏刪落，良有以也。

（『三國志』161頁 卷五后妃傳，『三國志集解』12b～13a）

と述べており、信憑性について疑っていたようである。

『史通』卷七・曲筆第二十五には

若王沈魏錄濫述貶甄之詔，陸機晉史虛張拒葛之鋒，班固受金而始書，陳壽借米而方傳，此又記言之奸賊、載筆之凶人，雖肆諸市朝投畀豺虎可也。

（『史通通釋』¹⁷卷七 8b）

とあり、『魏書』は甄皇后を貶める詔勅を記載していると述べている。これについて今鷹眞氏は「罪のないりっぱな皇后を殺したとするために皇后をほめあげたとなると、ずいぶん手のこんだ細工といわねばならない。」¹⁸と述べておられるが、そのとおりであろう。

以上のように見ると、陳壽は王沈『魏書』に採録されている上奏文や死の経緯を眞實とは受け取っていなかったと考えられる。そして、甄皇后の立后と死の経緯をはっきりと記そうとしたように思われる。

后妃傳では主として魚豢『魏略』を典據としたと考えられ、王沈『魏書』は典據の一つではあっても主たる典據とはされていない。ただ、明元郭皇后傳については、亡くなったのが景元四年（263年）、埋葬は景元五年（264年）であり、この頃にはすでに『魏略』が完成していたと考えられる¹⁹ことから、典據としては『魏略』のほかに『魏書』や公文書を推定する必要があるろう。

卷六董二袁劉傳についてであるが、董卓傳では、『獻帝起居注』3條²⁰・『獻帝紀』2條²¹・『英雄記』3條²²・『典略』1條²³・『魏書』3條²⁴・『靈帝紀』1條²⁵が典據であったと判断でき、また典據であった可能性の高いものとして『九州春秋』1條²⁶を挙げることができる。

袁紹傳については、『英雄記』1條²⁷・『典論』1條²⁸を典據と見ることができ、典據であった可能性があるものとして、謝承『後漢書』1條²⁹・『獻帝春秋』1條³⁰・『九州春秋』1條³¹を挙げることができる。

袁術傳については、『吳書』1條³²・『獻帝春秋』1條³³を典據と見ることができる。また、典據であった可能性があるものとして、『典略』1條³⁴を挙げることができる。

劉表傳については、『戰略』1條³⁵・『英雄記』1條³⁶・『傅子』2條³⁷・『零陵先賢傳』1條³⁸が典據であったと見ることができ、典據であった可能性があるものとして『先賢行狀』1條³⁹を挙げることができる。

卷六については各傳における典據と思われる史籍が比較的多く、特に董卓に關しては非常に多い。裴注と比較するとよくわかるが、それだけ陳壽が事實を簡潔にまとめあげたということであり、また後漢時代に關しては先行史籍が豊富であったことを示している。

ただ、〔表1〕を見てもわかるとおり、『三國志』卷六裴注所引史籍として『魏略』が全く登場しないことや『魏略』が曹魏時代を扱った斷代史と考えら

れる⁴⁰ことからすると、卷六では『魏略』は典據となっていなかった可能性がある。

卷六に関する上記の史籍のうち、『獻帝起居注』・『獻帝紀』・『英雄記』・『靈帝紀』が王沈『魏書』、もしくは魚豢『典略』にとっても先行史籍であることから、『魏書』・『典略』に同様の記事があった可能性が高く、やはり王沈『魏書』・魚豢『典略』が主な典據となったと思われる。

以上のようなことから、卷六の典據となった史籍は『三國志』の他の傳と比べて多いということ、その中でも主な典據となったのは王沈『魏書』・魚豢『典略』と考えられることが指摘できる。

卷七呂布臧洪傳について、呂布傳では『英雄記』3條⁴¹・『典略』1條⁴²が典據であったと見ることができ、典據であった可能性があるものとして『先賢行狀』1條⁴³・『九州春秋』1條⁴⁴を挙げることができる。

臧洪傳については、典據であった可能性があるものとして謝承『後漢書』1條⁴⁵・『九州春秋』1條⁴⁶が挙げられる。

〔表1〕を見ると、卷七についても卷六同様、各傳における典據と思われる史籍が比較的多いことがわかる。また、これも卷六同様、『三國志』卷七裴注所引史籍として『魏略』が全く登場しないことなどから、卷七でも『魏略』は典據となっていなかった可能性が考えられる。

卷七に関する上記の史籍のうち、『英雄記』は王沈『魏書』、もしくは魚豢『典略』にとっても先行史籍であることから、『魏書』・『典略』に同様の記事があった可能性が高い。

『三國志』卷七裴注では王沈『魏書』も全く引用されていない。しかし、王沈『魏書』佚文から判断すると董卓傳や袁紹傳・劉虞傳があったと考えられる⁴⁷ことを踏まえると、『魏書』に呂布傳や臧洪傳が無かったことが考えにくく、また本紀でのその重要性をも考慮すると、やはり王沈『魏書』が主な典據となったと思われる。

以上のようなことから考えると、卷七の主な典據としては王沈『魏書』・魚

蔡「典略」が擧げられる。

卷八二公孫陶四張傳について、公孫瓚傳では『典略』2條⁴⁸・『英雄記』4條⁴⁹が典據と見ることができ、典據であった可能性があるものとして『九州春秋』2條⁵⁰・『吳書』1條⁵¹・『魏書』1條⁵²・『獻帝春秋』1條⁵³が擧げられる。

陶謙傳については典據であった可能性があるものとして『吳書』2條⁵⁴・謝承『後漢書』1條⁵⁵を擧げることができる。

張楊傳については典據であった可能性があるものとして『靈帝紀』1條⁵⁶が擧げられる。

公孫度傳（公孫康傳・公孫恭傳・公孫晃傳・公孫淵傳）については『魏略』3條⁵⁷が典據であったと見ることができ、典據であった可能性があるものとして『魏書』1條⁵⁸・『吳書』1條⁵⁹が擧げられる。

張燕傳については典據であった可能性があるものとして『九州春秋』1條⁶⁰を擧げることができる。

張魯傳については典據であった可能性があるものとして『典略』1條⁶¹を擧げることができる。

張繡傳について裴注からは典據と判断できるものは存在しない。しかし、典據となった史書として王沈『魏書』や魚豢『魏略』⁶²を考えるのが自然ではないかと思われる。

〔表1〕を見ると、卷八の公孫瓚傳・公孫度（公孫康・公孫恭・公孫晃・公孫淵）傳については典據と思われる史籍が比較的多いことがわかる。卷八に関する上記の史籍のうち、『英雄記』・『靈帝紀』は王沈『魏書』、もしくは魚豢『典略』・『魏略』にとっても先行史籍であることから、『魏書』・『典略』・『魏略』に同様の記事があった可能性が高い。

以上のようなことから考えると、卷八の中心的な典據としてはやはり王沈『魏書』・魚豢『典略』が擧げられ、公孫度傳・公孫康傳・公孫恭傳・公孫晃傳・公孫淵傳・張繡傳については『典略』ではなく『魏略』、陶謙傳については『吳書』⁶³が擧げられる。

卷九諸夏侯曹傳について、夏侯惇傳では『魏書』1條⁶⁴が典據であったと見ることができ、典據であった可能性があるものとして『魏略』2條⁶⁵を挙げることができる。

夏侯淵傳については典據であった可能性があるものとして『魏略』1條⁶⁶を挙げることができる。

曹仁傳については、曹純傳にあたる部分で典據であった可能性があるものとして『英雄記』1條⁶⁷を挙げることができる。

曹洪傳・曹休傳については裴注から典據と判断できるものは存在しない。しかし、注に引用された文章と注がついた本文との前後関係から王沈『魏書』の可能性が高いと思われる。

曹眞傳（曹爽傳・何晏傳）については『魏書』1條⁶⁸が典據であったと見ることができ、典據であった可能性があるものとして曹爽傳における『魏末傳』1條⁶⁹を挙げることができる。

夏侯尚傳については、夏侯玄傳にあたる部分で典據であった可能性があるものとして『魏書』1條⁷⁰・『魏略』1條⁷¹を挙げることができる。

〔表1〕を見ると、『三國志』卷九裴注所引史籍として『典略』が全く登場しないことなどから、卷九では『典略』は典據となっていなかった可能性がある。

上記の内容や〔表1〕を見ると、卷九については典據と思われる史籍が少なくなっており、王沈『魏書』・魚豢『魏略』が主たる典據であることは一見しただけでわかる。卷九に関する上記の史籍のうち、『英雄記』は王沈『魏書』、もしくは魚豢『魏略』にとっても先行史籍であることから、『魏書』・『魏略』に同様の記事があった可能性が高い。

以上のようなことから考えると、卷九の主たる典據としては王沈『魏書』・魚豢『魏略』が挙げられる。

卷十荀彧荀攸賈詡傳について、荀彧傳（荀惲傳・荀勗傳・荀冀傳）では、『荀彧別傳』2條⁷²・『典略』1條⁷³が典據であったと考えることができ、典據

であった可能性があるものとして『三輔決録』注1條⁷⁴・『曹瞞傳』1條⁷⁵を挙げることができる。

荀攸傳については、『魏書』1條⁷⁶・『漢末名士錄』1條⁷⁷が典據であったと考えることができる。

賈詡傳については『獻帝紀』2條⁷⁸・『魏書』1條⁷⁹が典據であったと考えることができ、典據であった可能性があるものとして『典略』1條⁸⁰を挙げることができる。

上記の内容や〔表1〕を見ると、卷十については卷九と同様、典據と思われる史籍が少なくなっている。卷十に関する上記の史籍のうち、『獻帝紀』・『荀彧別傳』は王沈『魏書』、もしくは魚豢『典略』・『魏略』にとっても先行史籍であったと考えられることから、『魏書』・『典略』・『魏略』に同様の記事があった可能性が高い。

以上のようなことから考えると、卷十の主たる典據としてはやはり王沈『魏書』・魚豢『典略』・『魏略』が挙げられる。

おわりに

以上の内容をまとめると、次のようになる。

◎裴松之注所引史籍佚文から推測可能な陳壽『三國志』の典據

（書名は裴注所引のもの）

『三國志』 卷一武帝紀	…… 『魏書』・『魏略』・『曹瞞傳』・『魏武故事』・『獻帝傳』・『褒賞令』
『三國志』 卷二文帝紀	…… 『魏書』・『典論』・『魏略』？
『三國志』 卷三明帝紀	…… 『魏書』・『魏略』
『三國志』 卷四齊王紀	…… 『魏書』・『魏略』
高貴鄉公紀	…… 『魏書』・『魏略』

- 陳留王紀 …… 『魏書』？
- 【三國志】卷五武宣卞皇后傳 …… 『魏略』·『魏書』
- 文昭甄皇后傳 …… 『魏略』·『魏書』
- 文德郭皇后傳 …… 『魏略』？·『魏書』？
- 明悼毛皇后傳 …… 『魏略』？·『魏書』？
- 明元郭皇后傳 …… 『魏書』？
- 【三國志】卷六董卓（李傕·郭汜）傳
- …… 『獻帝起居注』·『獻帝紀』·『英雄記』·
『典略』·『魏書』·『靈帝紀』·『九州春秋』？
- 袁紹（袁譚·袁尚）傳
- …… 『英雄記』·『典論』·謝承『後漢書』·
『獻帝春秋』·『九州春秋』？·『魏書』？·
『典略』？
- 袁術傳 …… 『吳書』·『獻帝春秋』·『魏書』？·『典略』？
- 劉表傳 …… 『戰略』·『英雄記』·『傅子』·『零陵先賢
傳』·『先賢行狀』？·『魏書』？·『典略』？
- 【三國志】卷七呂布（張邈·陳登）傳
- …… 『英雄記』·『典略』·『先賢行狀』？·『九
州春秋』？·『魏書』？
- 臧洪傳 …… 謝承『後漢書』？·『九州春秋』？·『魏
書』？·『典略』？
- 【三國志】卷八公孫瓚傳
- …… 『典略』·『英雄記』·『九州春秋』？·『吳
書』？·『魏書』？·『獻帝春秋』？
- 陶謙傳 …… 『吳書』·謝承『後漢書』·『魏書』？·
『典略』？
- 張楊傳 …… 『靈帝紀』·『魏書』？·『典略』？
- 公孫度（公孫康·公孫恭·公孫晃·公孫淵）傳
- …… 『魏略』·『魏書』？·『吳書』？
- 張燕傳 …… 『九州春秋』·『魏書』？·『典略』？·『魏
略』？
- 張繡傳 …… 『魏書』？·『魏略』？

張魯傳 ……【典略】・【魏書】？

【三國志】卷九夏侯惇（韓浩・史渙）傳

……【魏書】・【魏略】？

夏侯淵傳 ……【魏略】・【魏書】？

曹仁（曹純）傳 ……【英雄記】・【魏書】？・【魏略】？

曹洪傳 ……【魏書】？・【魏略】？

曹休（曹肇）傳 ……【魏書】？・【魏略】？

曹眞（曹爽・何晏）傳

……【魏書】・【魏末傳】？・【魏略】？

夏侯尚（夏侯玄）傳

……【魏書】・【魏略】

【三國志】卷十荀彧（荀惲・荀繇・荀眞）傳

……【荀彧別傳】・【典略】・【三輔決錄】注？・
【曹瞞傳】？・【魏書】？・【魏略】？

荀攸傳 ……【魏書】・【漢末名士錄】・【典略】？・【魏略】？

賈詡傳 ……【獻帝紀】・【魏書】・【典略】？・【魏略】？

以上のようなことから、【魏志】武帝紀・文帝紀・明帝紀については王沈【魏書】・魚豢【魏略】に依據していたことや、裴注所引の文章の中で実際に典據とされたものは王沈【魏書】のほうが多いことを指摘することができる。【曹瞞傳】・【魏武故事】・【典論】・【獻帝傳】・【褒賞令】については王沈【魏書】、もしくは【魏略】に同様の記事があった可能性が高く、裴注所引史籍の中で本紀の主な典據となったものとしては王沈【魏書】・【魏略】の二冊と特定して考えられる。

卷四三少帝紀のうち、齊王紀・高貴郷公紀については【魏書】や【魏略】を典據としていたと考えられる。しかし、高貴郷公紀については、齊王紀までとは異なり劇的・小説的描寫が多く、簡潔な記述とは言えない。王沈【魏書】だけでなく他の書籍に依據した部分が多いためと思われるが、陳壽【三國志】高

貴郷公紀本文が『魏書』とほぼ同じである可能性も考えられる。陳留王紀についても主な典拠は『魏書』と思われるが、陳壽の本文自体が短く、また王沈『魏書』の完成年代と近いことから、他の書籍や公文書を典拠とした可能性も充分考えられる。

卷五后妃傳についてもおそらく王沈『魏書』・魚豢『魏略』に依據していたと推測されるが、内容を比較すると、特に卞皇后傳・甄皇后傳については、引用された王沈『魏書』の内容と『魏志』本文とがかなり異なっていることから、ここは主として魚豢『魏略』を典拠としたのではないかと考えられる。ただし、明元郭皇后傳の『魏略』完成後の年代の記事については『魏書』や公文書に依據した部分があると思われる。

卷六については典拠と思われる史籍が比較的多く、特に董卓傳に関しては非常に多い。陳壽が事実を簡潔にまとめあげたということ、また後漢時代に関しては先行史籍が豊富であったことを示している。ただ、『三國志』卷六裴注所引史籍として『魏略』が全く登場せず、また『魏略』が曹魏時代を扱った斷代史と考えられることから、卷六では『魏略』は典拠となっていなかった可能性がある。卷六裴注所引史籍のうち、『獻帝起居注』・『獻帝紀』・『英雄記』・『靈帝紀』が王沈『魏書』、もしくは魚豢『典略』にとっても先行史籍であることから、『魏書』・『典略』に同様の記事があった可能性が高く、やはり王沈『魏書』・魚豢『典略』が主な典拠となったと思われる。

卷七でも典拠と思われる史籍が比較的多いことがわかる。また、『三國志』卷七裴注所引史籍として『魏略』が全く登場しないことなどから、卷七でも『魏略』は典拠となっていなかった可能性がある。卷七裴注所引史籍のうち、『英雄記』は王沈『魏書』、もしくは魚豢『典略』にとっても先行史籍であることから、『魏書』・『典略』に同様の記事があった可能性が高い。

『三國志』卷七裴注では王沈『魏書』も全く引用されていないが、王沈『魏書』佚文全體から判断すると『魏書』に呂布傳や臧洪傳が無かったことが考えにくく、また本紀でのその重要性をも考慮すると、やはり王沈『魏書』・魚豢『典略』が主な典拠となったと思われる。

卷八の公孫瓚傳・公孫度（公孫康・公孫恭・公孫晃・公孫淵）傳については典據と思われる史籍が比較的多い。卷八裴注所引史籍のうち、『英雄記』・『靈帝紀』は王沈『魏書』、もしくは魚豢『典略』・『魏略』にとっても先行史籍であることから、『魏書』・『典略』・『魏略』に同様の記事があった可能性が高い。以上のようなことから考えると、卷八の中心的な典據としてはやはり王沈『魏書』・魚豢『典略』・『魏略』が挙げられ、陶謙傳については章昭『吳書』も加えることができる。

卷九については典據と思われる史籍が少なくなっており、王沈『魏書』・魚豢『魏略』が主たる典據であることは一見しただけでわかる。また、『三國志』卷九裴注所引史籍として『典略』が全く登場しないことなどから、卷九では『典略』は典據となっていなかった可能性がある。卷九裴注所引史籍のうち、『英雄記』は王沈『魏書』、もしくは魚豢『魏略』にとっても先行史籍であることから、『魏書』・『魏略』に同様の記事があった可能性が高く、卷九の主たる典據としては王沈『魏書』・魚豢『魏略』が挙げられる。

卷十については卷九と同様、典據と思われる史籍が少なくなっている。卷十裴注所引史籍のうち、『獻帝紀』・『荀彧別傳』は王沈『魏書』、もしくは魚豢『典略』・『魏略』にとっても先行史籍であったと考えられることから、『魏書』・『典略』・『魏略』に同様の記事があった可能性が高く、卷十の主たる典據としてはやはり王沈『魏書』・魚豢『典略』・『魏略』が挙げられる。

このように見ると、『三國志』裴注所引史籍・典籍の中で主な典據としてはやはり王沈『魏書』・魚豢『典略』・『魏略』が挙げられ、本紀での重要性から考えると基本的には王沈『魏書』を中心的典據としたのではないかと思われる。ただし、内容や年代によっては『魏略』・『典略』のほうが中心となっている場合もある。

また、『魏志』の中でも傳によって典據と思われる史籍がかなり異なっており、特に後漢時代の人物については典據であった可能性のある史籍が多い。おそらくはこの時代について陳壽が著述する頃までに多くの史籍で取り上げられていたため、陳壽が典據とすべき史籍が多かったものと思われる。

ただ、『典略』・『魏略』に関しては、後漢時代末に関する記事では重複している部分もあると考えられる。上記のまとめにおいては大まかに考えて『魏略』・『典略』どちらか一つを記載している場合が多いが、特に巻一、巻二、巻五～巻十については、細かな部分ではどちらも典拠とされている可能性があることを付記しておく。

『三國志』蜀書の場合には、裴注所引佚文からは典拠を特定することが難しかった⁸¹が、『魏志』巻一～巻十についてはそのような部分は少なかった。ただし、巻四高貴郷公紀・陳留王紀や巻五明元郭皇后傳については、王沈『魏書』以外の史籍を典拠として想定することが難しく、公文書などの原史料を参考としたのではないかと思われる。

今回は『三國志』裴注から『魏志』の典拠を特定しようとしたわけだが、紙幅の都合から巻十までとなった。巻十一以降は稿を改めて述べることにしたい。また、『三國志』裴注に引用された史籍の裴注以外の佚文、そして裴注に引用されていない史籍の佚文を類書等から収集・精査することで『魏志』の典拠をさらに明らかにしていくことを今後の課題としたいと考えている。

- 1 拙稿「王沈『魏書』研究」(『創価大學大学院紀要』第二十集 1999年)
- 2 該当する『魏書』の記載されている中華書局版『三國志』(以下『志』)と『三國志集解』(以下『集解』)の頁数を記す(以下、他書も同様)。
 『志』4頁・『集解』13b～14a, 『志』4頁・『集解』14a, 『志』4～5頁・『集解』15a～b, 『志』8頁・『集解』23b, 『志』8頁・『集解』24a, 『志』8頁・『集解』24b, 『志』9頁・『集解』25a～b, 『志』12～13頁・『三國志集解』32a～b, 『志』14頁・『集解』36b～37a, 『志』15頁・『集解』38a, 『志』26頁・『集解』60a～b, 『志』27頁・『集解』61a, 『志』29頁・『集解』65a～b, 『志』36頁・『集解』84a, 『志』36頁・『集解』85a, 『志』46頁・『集解』112b, 『志』49頁・『集解』117b
- 3 『志』2頁・『集解』9a, 『志』21～22頁・『集解』49b～50b
- 4 『志』32～34頁・『集解』78b～81b, 『志』50頁・『集解』120a
- 5 『志』48頁・『集解』115a～116b
- 6 『志』41～42頁・『集解』99b～100a
- 7 『志』23頁・『集解』53a～b
- 8 『志』4頁・『集解』14b～15a

- 9 【志】58頁・【集解】5 a, 【志】59頁・【集解】6 a, 【志】59頁・【集解】6 a, 【志】59頁・【集解】7 a～b, 【志】59頁・【集解】7 b～8 a, 【志】61頁・【集解】11 a, 【志】77頁・【集解】42 b～43 a, 【志】78頁・【集解】47 a～b, 【志】82～3頁・【集解】57 a～b, 【志】83頁・【集解】58 b
- 10 【志】89～90頁・【三國志集解】71 a～74 a
- 11 【志】93頁・【集解】6 a～7 b, 【志】94頁・【集解】8 a
- 12 【志】99頁・【集解】21 a～b, 【志】108頁・【集解】40 b, 【志】110頁・【集解】46 b～47 a
- 13 本田濟「陳壽の三國志について」（『東方學』23 1962年）
- 14 【志】156～157頁・【集解】4 a～b
- 15 【志】160頁・【集解】11 a
- 16 【志】162頁・【集解】13 b～14 a
- 17 劉知機〔撰〕浦起龍〔釋〕『史通通釋』（四部備要版 台湾中華書局 1965年）
- 18 「解説—裴注引用史書について」より
（今鷹眞・小南一郎〔訳〕『正史三國志4』498～499頁 筑摩書房 1993年）
- 19 津田資久「『魏略』の基礎的研究」（『史朋』31 1998年）
- 20 【志】175頁・【集解】8 a～9 a, 【志】183～184頁・【集解】26 b～28 a, 【志】184～185頁・【集解】28 b～29 b
- 21 【志】174～175頁・【集解】7 b～8 a, 【志】186～187頁・【集解】32 a
- 22 【志】175頁・【集解】9 a～b, 【志】178頁・【集解】15 a, 【志】179～180頁・【集解】18 b～19 a
- 23 【志】183頁・【集解】26 a～b
- 24 【志】178頁・【集解】14 b, 【志】179頁・【集解】17 a, 【志】187頁・【集解】33 a
- 25 【志】172頁・【集解】3 b～4 a
- 26 【志】183頁・【集解】25 b～26 a
- 27 【志】191頁・【集解】40 b
- 28 【志】203頁・【集解】62 a
- 29 【志】193頁・【集解】43 b～44 b
- 30 【志】195頁・【集解】49 a
- 31 【志】195～196頁・【集解】51 a～b
- 32 【志】208頁・【集解】72 b～73 a
- 33 【志】208～209頁【集解】74 b
- 34 【志】210頁・【集解】76 a
- 35 【志】211～212頁・【集解】80 b～82 a
- 36 【志】212頁・【集解】83 b～84 a
- 37 【志】213頁・【集解】85 a～b, 【志】215頁・【集解】89 a～b
- 38 【志】216頁・【集解】90 a～b

- 39 〔志〕 215頁・〔集解〕 89 b
- 40 津田資久前掲論文
- 41 〔志〕 221頁・〔集解〕 3 b～4 a, 〔志〕 223頁・〔集解〕 6 b, 〔志〕 223～224頁・〔集解〕 7 a～8 a
- 42 〔志〕 229頁・〔集解〕 15 a～b
- 43 〔志〕 230～231頁・〔集解〕 16 a～18 a
- 44 〔志〕 226頁・〔集解〕 10 b～11 b
- 45 〔志〕 231頁・〔集解〕 18 b～19 a
- 46 〔志〕 232頁・〔集解〕 21 b
- 47 拙稿「王沈〔魏書〕研究」
- 48 〔志〕 240頁・〔集解〕 1 b, 〔志〕 246～247頁・〔集解〕 15 b
- 49 〔志〕 244～245頁・〔集解〕 11 a, 〔志〕 245頁・〔集解〕 12 a～b, 〔志〕 245頁・〔集解〕 12 b, 〔志〕 247頁・〔集解〕 16 a
- 50 〔志〕 240頁・〔集解〕 3 a, 〔志〕 241頁・〔集解〕 6 a～b
- 51 〔志〕 241～242頁・〔集解〕 6 a～b
- 52 〔志〕 241頁・〔集解〕 4 a～b
- 53 〔志〕 247頁・〔集解〕 15 b
- 54 〔志〕 248～249頁・〔集解〕 19 a～b, 〔志〕 249～250頁・〔集解〕 21 b～22 b
- 55 〔志〕 249頁・〔集解〕 20 b～21 a
- 56 〔志〕 251頁・〔集解〕 24 a
- 57 〔志〕 255～256頁・〔集解〕 29 a～30 a, 〔志〕 256～257頁・〔集解〕 30 b～32 a, 〔志〕 261頁・〔集解〕 38 b
- 58 〔志〕 258～260頁・〔集解〕 33 b～36 b
- 59 〔志〕 254～255頁・〔集解〕 28 b～29 a
- 60 〔志〕 261～262頁・〔集解〕 39 b～40 a
- 61 〔志〕 264頁・〔集解〕 44 b～45 a
- 62 津田資久前掲論文では〔魏略〕張繡傳の存在が想定されており, 〔典略〕には記載が少なかったと思われる。
- 63 津田資久前掲論文では陶謙傳が〔魏略〕・〔典略〕ともに想定されていないことから, 〔魏書〕以外の主たる典據として〔吳書〕を想定しておく。
- 64 〔志〕 269～270頁・〔集解〕 5 a～b
- 65 〔志〕 268頁・〔集解〕 2 b, 〔志〕 269頁・〔集解〕 4 a～b
- 66 〔志〕 272～273頁・〔集解〕 10 a～b
- 67 〔志〕 277頁・〔集解〕 16 a
- 68 〔志〕 281頁・〔集解〕 24 a
- 69 〔志〕 285～286頁・〔集解〕 32 b～33 b
- 70 〔志〕 302頁・〔集解〕 59 a

- 71 【志】 303頁・【集解】 60 a～61 a
- 72 【志】 315頁・【集解】 16 a～17 a, 【志】 317～318頁・【集解】 21 a～b
- 73 【志】 311頁・【集解】 8 b
- 74 【志】 312頁・【集解】 12 b～13 a
- 75 【志】 310頁・【集解】 7 a
- 76 【志】 324頁・【集解】 32 a
- 77 【志】 322頁・【集解】 28 a～29 a
- 78 【志】 328頁・【集解】 36 b, 【志】 328頁・【集解】 37 a
- 79 【志】 328頁・【集解】 36 b
- 80 【志】 311頁・【集解】 37 b
- 81 拙稿「【三國志】蜀書の典據について」

（『創価大學大学院紀要』第二十三集 2002年）

〔表1〕『魏志』(卷一～卷十)における裴松之注所引史籍について

(凡例)

- 1 文字数は中華書局版『三國志』の文章から句讀點,「〇〇曰」などの書名や「臣松之按(以爲)」などをすべて取り去ったもので数えている。
- 2 史籍の配列は裴松之注における文字数の多い順番とした。同数のものは條数の多いものの順としてある。
- 3 「陳壽参照」では陳壽が『三國志』を著す際に典據としたと考えられるものに「※」を附している。
- 4 「陳壽参照條數」は「陳壽参照」で「※」が附された史籍の中で陳壽が『三國志』を著す際に典據としたであろうものの條數を示している。
- 5 異なった書名で引用されているが同一史籍である場合は、備考欄に別名と條數を附し、條數にはその數を加算してある。
- 6 裴松之自注に引用されている史籍については、個々の史籍の條數・文字數に加算し、備考欄に裴松之自注所引條數・文字數を示してある。

書名	陳壽参照	條數	文字數	陳壽典據條數	備考
卷一武帝紀					
〔魏書〕	※	41	4394	17	
〔曹瞞傳〕	※	16	1662	2	
〔魏武故事〕	※	3	1175	2	
裴松之〔三國志〕注		16	773		
〔獻帝傳〕	※	1	661	1	
〔魏略〕	※	4	572	1	
〔魏晉世語〕		13	514		
〔獻帝起居注〕	※	5	456	0	
〔續漢書〕		5	438		
〔九州春秋〕	※?	3	415	0(1)	
〔英雄記〕(〔漢末英雄記〕)	※	5	290	0	
〔三輔決錄〕注	※?	1	269	0	
〔逸士傳〕		1	256		
〔漢魏春秋〕		1	236		
〔漢紀〕(張璠〔後漢紀〕)		3	228		
〔獻帝春秋〕	※?	5	203	0	
〔異同雜語〕		4	192		〔雜記〕1條,〔異同評〕2條
〔褒賞令〕載曹公祀文	※	1	173	1	
〔魏氏春秋〕		4	161		
〔四體書勢〕序		2	153		
〔山陽公載記〕	※?	2	149	0	
孫盛曰～		3	143		

【三國志】魏書の典據について（卷一～卷十）（257）

【傳子】	※？	3	130	0
【博物志】		1	102	
【五言詩】		1	100	
【典略】	※	1	98	0
【尚書】（鄭玄注）		5	81	
【先賢行狀】	※？	1	79	0
【江表傳】		1	74	
【後漢書】（謝承）	※？	1	54	0
【吳書】	※	1	48	0
【張超集】	※	1	44	0
【漢晉春秋】		1	44	
【春秋公羊傳】		1	29	
【春秋左氏傳】		1	22	
【國語】（韋昭注）		1	21	
【典論】	※	1	17	0
【獻帝紀】	※	1	6	0
【靈帝紀】	※	1	5	0
【家誡】（王昶）	※	1	4	0
【三蒼】		1	3	
卷二文帝紀				
【獻帝傳】	※	2	8772	0
【魏書】	※	25	2042	10
【文帝誅】	※	1	1225	0
【典論】	※	1	931	1
【魏略】	※	7	857	0
孫盛曰～		4	654	
【漢紀】（袁宏【後漢紀】）		2	296	
裴松之【三國志】注		8	216	
【續漢書】		1	139	
【搜神記】		1	124	
【管子】		1	94	
【獻帝起居注】	※	1	43	0
【魏氏春秋】		2	37	
【博物志】		1	27	
【呂氏春秋】		1	26	
【吳歷】	※？	1	23	0
【漢書】注		2	18	
【大墓賦】		1	12	
【百一詩】	※	1	10	0

【漢書】		1	7		
卷三明帝紀					
【魏略】	※	12	2961		2
【獻帝傳】	※	2	1045		0
【魏書】	※	11	964		3
【漢晉春秋】		4	547		
【三國志】裴松之注		5	368		
【魏氏春秋】		4	337		
【魏名臣奏】	※	1	249		0
【搜神記】		1	195		
孫盛曰～		3	179		
【三輔決錄】注	※?	1	173		0
【晉紀】		2	145		
【魏晉世語】		4	121		
魚豢曰～	※	1	98		0
【傅子】	※	1	68		0
【魏末傳】	※?	1	58		0
【啓蒙】注		1	54		
【博物志】		1	52		
【志記】	※	1	8		0
卷四齊王紀					
【魏書】	※	2	1253		0
【漢晉春秋】		4	899		
【魏略】	※	2	579		0
【三國志】裴松之注		6	448		
【晉紀】		1	211		
【漢魏春秋】		1	196		
【魏氏春秋】		3	174		
【搜神記】		1	154		
習鑿齒曰～		1	118		
【魏晉世語】		1	109		
【神異經】		1	84		
【異物志】		1	73		
【傅子】	※	1	61		0
【魏世譜】		2	40		
高貴鄉公紀					
【魏氏春秋】		5	1206		
【漢晉春秋】		4	470		
【三國志】裴松之注		6	421		

【楚國先賢傳】		1	215		
【高貴郷公集】	※？	1	201	0	
【魏名臣奏】	※	1	186	0	
【魏晉世語】		4	133		
【晉諸公贊】		2	111		
【魏末傳】	※？	1	73	0	
【明堂論】		1	39		
【晉紀】		1	36		
【禮記】注		2	27		
陳留王紀					
【漢晉春秋】		1	141		
孫盛曰～		1	21		
【魏世譜】		1	20		
卷五卞皇后傳					
【魏略】	※	4	547	1	
【魏書】	※	4	344	0	
【三國志】裴松之注		1	47		
甄皇后傳					
【魏書】	※	4	1079	1	
【晉諸公贊】		1	296		
【魏略】	※	2	185	1	
孫盛曰～		1	99		
【三國志】裴松之注		1	97		
【魏晉世語】		1	60		
文德郭皇后傳					
【魏書】	※	4	367	0	
【漢晉春秋】		1	89		
【魏略】	※	1	66	0	
毛皇后傳					
孫盛曰～		1	97		
明元郭皇后傳					
【晉諸公贊】		1	22		
【魏略】	※	1	16	0	
卷六董卓傳（李傕傳・郭汜傳）					
【獻帝起居注】	※	4	1477	3	
【獻帝紀】	※	8	738	2	
【英雄記】（【漢末英雄記】）	※	12	714	3	
【後漢紀】（張璠）		4	563		
【續漢書】		3	448		

〔後漢書〕(謝承)	※?	2	387	0	
〔典略〕	※	4	300	1	
〔後漢書〕(華嶠)	(※?)	2	285	0	華嶠〔漢書〕2條
〔九州春秋〕	※?	3	284	1	
〔魏書〕	※	5	274	2(3)	
〔三國志〕裴松之注		2	188		
〔靈帝紀〕	※	1	149	1	
〔三輔決錄〕注	※?	1	118	0	
〔山陽公載記〕	※?	1	115	0	
〔傅子〕	※	1	84	0	
華嶠曰～	※?	1	77	0	
〔吳書〕	※	1	60	0	
〔獻帝春秋〕	※?	1	34	0	
〔風俗通〕		1	13		
袁紹傳(袁譚傳・袁尚傳)					
〔魏氏春秋〕		3	1737		
〔英雄記〕(〔漢末英雄記〕)	※	8	1337	1	
〔漢晉春秋〕		1	938		
〔獻帝傳〕	※	5	898	0	
〔九州春秋〕	※?	4	705	1	
〔先賢行狀〕	※?	3	617	0	
〔三國志〕裴松之注		7	289		
〔後漢書〕(謝承)	※	1	258	0(1)	
〔典略〕	※	4	226	0	
〔獻帝春秋〕	※?	3	200	0(1)	1條21字〔山陽公載記〕と同文
孫盛曰～		1	115		
〔後漢書〕(華嶠)	(※?)	1	86	0	華嶠〔漢書〕1條
〔典論〕	※	1	82	1	
〔魏書〕	※	2	56	0	1條10字〔三國志〕裴松之注
〔吳同雜語〕		1	53		〔孫盛評〕1條53字
〔續漢書〕		1	50		
〔獻帝紀〕	※	1	42	0	
〔漢末名士錄〕	※?	1	34	0	
〔山陽公載記〕		1	21		1條21字〔獻帝春秋〕と同文
〔吳書〕	※	1	11	0	
〔魏晉世語〕		1	8		
〔後漢紀〕(張璠)		1	7		
〔曹瞞傳〕	※	1	4	0	
袁術傳					

『吳書』	※	2	407	1	
『魏書』	※	1	103	0	
『三國志』裴松之注		1	98		
『九州春秋』	※?	1	96	0	
『英雄記』(『漢末英雄記』)	※	1	84	0	1條84字『三國志』裴松之注
『獻帝春秋』	※?	1	69	1	
『典略』	※	1	43	0(1)	
『三輔決錄』注	※?	1	38	0	
劉表傳					
『傅子』	※	3	531	2	
『戰略』	※?	1	346	1	
『零陵先賢傳』	※?	1	284	1	
『漢晉春秋』		3	182		
『搜神記』		1	180		
『魏武故事』	※	1	164	0	
『後漢書』(謝承)	※	1	89	0	
『先賢行狀』	※?	1	86	1	
『典略』	※	1	81	0	
『英雄記』(『漢末英雄記』)	※	2	74	1	
『漢末名士錄』	※?	1	50	0	
『後漢紀』(張璠)		1	31		
『魏晉世語』		1	28		
『三國志』裴松之注		3	24		
『文章志』		1	12		
卷六評					
『三國志』裴松之注		1	142		
『英雄記』(『漢末英雄記』)	※	1	36	0	
卷七呂布傳(張邈傳・陳登傳)					
『英雄記』(『漢末英雄記』)	※	12	1681	3	1條26字『三國志』裴松之注
『先賢行狀』	※?	1	630	0(1)	
『典略』	※	2	390	0(1)	
『獻帝春秋』	※?	3	362	0	
『九州春秋』	※?	2	270	0(1)	
『魏氏春秋』		1	124		
『三國志』裴松之注		2	47		
『曹瞞傳』	※	1	14	0	
『詩經』		1	11		
臧洪傳					
『後漢書』(謝承)	※?	1	187	0(1)	

〔三國評〕		1	173		
〔九州春秋〕	※?	1	160	0(1)	
〔三國志〕裴松之注		3	130		
〔英雄記〕(〔漢末英雄記〕)	※	1	20	0	1條20字〔三國志〕裴松之注
卷八公孫瓚傳					
〔漢晉春秋〕		2	941		
〔典略〕	※	4	774	2	
〔英雄記〕(〔漢末英雄記〕)	※	8	443	4	
〔吳書〕	※	2	439	0(1)	
〔魏氏春秋〕		1	194		
〔九州春秋〕	※?	2	94	0(2)	
〔魏略〕	※	2	84	0	
〔魏書〕	※	1	76	0(1)	
〔三國志〕裴松之注		2	67		
〔獻帝春秋〕	※?	1	51	1	
陶謙傳					
〔吳書〕	※	5	1206	0(2)	
〔後漢書〕(謝承)	※?	1	253	0(1)	
〔三國志〕裴松之注		1	23		
張楊傳					
〔靈帝紀〕	※	1	52	0(1)	
〔典略〕	※	1	44	0	
〔英雄記〕(〔漢末英雄記〕)	※	1	21	0	
公孫度傳(公孫康傳・公孫恭傳・公孫晃傳・公孫淵傳)					
〔魏略〕	※	3	1796	2(3)	
〔魏書〕	※	2	1601	0(1)	
〔吳書〕	※	2	403	0(1)	
〔魏名臣奏〕	※	1	355	0	
〔漢晉春秋〕		1	170		
〔晉陽秋〕		1	95		
〔三國志〕裴松之注		1	18		
張燕傳					
〔九州春秋〕	※?	1	94	0(1)	
〔典略〕	※	1	58	0	
〔晉惠帝起居注〕(陸機)		1	40		
〔漢紀〕(張璠〔後漢紀〕)		1	14		
張繡傳					
〔吳書〕	※	1	56	0	
〔傅子〕	※	1	36	0	

【魏略】	※	1	29	0
張魯傳				
【典略】	※	1	297	0(1)
【魏名臣奏】	※	1	270	0
【魏略】	※	2	261	0
習鑿齒曰～		1	140	
【魏晉世語】		1	114	
【三國志】裴松之注		2	41	
【晉書】		1	9	
卷九夏侯惇傳 (韓浩傳・史渙傳)				
【魏書】	※	2	368	1
【魏略】	※	2	224	0(2)
孫盛曰～		1	73	
【晉陽秋】		1	60	
夏侯淵傳				
【魏略】	※	2	348	0(1)
【魏晉世語】		2	328	
【文章敘錄】		1	44	
【魏書】	※	1	34	0
曹仁傳 (曹純傳)				
【英雄記】(『漢末英雄記』)	※	1	87	0(1)
【魏書】	※	3	81	0
【傅子】	※	1	16	0
曹洪傳				
【魏略】	※	1	248	0
【魏書】	※	1	14	0
曹休傳 (曹叅傳)				
【魏書】	※	2	107	0
【文士傳】(張隱)		1	71	
【魏晉世語】		1	4	
曹眞傳 (曹爽傳・何晏傳)				
【魏略】	※	4	2325	0
【魏書】	※	2	627	1
【魏末傳】	※?	3	528	0(1)
【魏晉世語】		6	436	
【列女傳】	※?	1	281	0
【三國志】裴松之注		5	236	
【漢晉春秋】		2	236	
【魏氏春秋】		2	170	

「晉紀」		2	53		
「晉書」(干寶)		1	32		
夏侯尚傳(夏侯玄傳)					
「魏略」	※	4	1068	0(1)	
「魏氏春秋」		4	783		
「魏晉世語」		7	531		
「魏書」	※	4	476	0(1)	
「漢晉春秋」		1	78		
「三國志」裴松之注		1	64		
「晉諸公贊」		1	41		
「異同雜語」		1	23		
「冀州記」		1	22		
「晉書」		1	20		
卷十荀彧傳(荀惲傳・荀肅傳・荀彧傳)					
「荀彧別傳」	※?	3	1095	2	
「荀彧傳」(「荀彧別傳」)	※?	1	509	0	
「三國志」裴松之注		8	493		
「平原瀾衡傳」	※	1	412	0	
「獻帝春秋」		1	320		
「文士傳」(張衡)		1	313		
「荀氏家傳」		4	241		
「漢紀」(張璠「後漢紀」)		3	237		1條10字「三國志」裴松之注
「晉陽秋」		2(3)	185(188)		1條3字「孫盛曰～」
「傅子」	※	1	132	0	
「典略」	※	3	116	1	
「三輔決錄」注	※?	1	82	0(1)	
「曹瞞傳」	※	1	77	0(1)	
「與韋端書」(「孔融集」)	※	1	49	0	
「晉紀」		1	33		
「魏晉世語」		1	31		
「逸士傳」	※?	1	26	0	
「魏氏春秋」		1	25		
「續漢書」		1	21		
孫盛曰～(「晉陽秋」)		1	3		「晉陽秋」の記事
荀攸傳					
「魏書」	※	8	309	1	
「漢末名士錄」	※?	1	290	1	
「漢紀」(張璠「後漢紀」)		2	183		
「傅子」	※	1	96	0	

「荀氏家傳」		2	59		
「三國志」裴松之注		2	58		
「孔融集」	※?	1	16	0	1條16字「荀氏家傳」
賈詡傳					
「九州春秋」		1	585	0	
「三國志」裴松之注		4	373		
「獻帝紀」	※	5	247	2	
「荀勗別傳」		1	39		
「傅子」	※	1	32	0	
「魏晉世語」		1	32		
「英雄記」(「漢末英雄記」)	※	1	30	0	
「典略」	※	1	22	0(1)	
「魏書」	※	1	18	1	
「魏略」	※	1	15	0	
「春秋左氏傳」		1	8		1條8字「三國志」裴松之注
卷十評					
「三國志」裴松之注		2	352		